

神奈川宿歴史の道

神奈川宿歴史の道 [改訂版]

発行：横浜市神奈川区役所 平成24年12月発行

協力：横浜市歴史博物館 学芸員 斉藤 司

問い合わせ先：横浜市神奈川区役所区政推進課

〒221-0824 横浜市神奈川区広台太田町3-8

TEL 045-411-7028 FAX 045-314-8890



廣重
印

東海道
五十三次内
神奈川
印



「神奈川石崎樓上十五景一望之圖」横浜開港資料館所蔵

はじめに

東海道神奈川宿

東海道五十三次のひとつ神奈川宿。この地名が県の名前や区の名前の由来です。またここが、近代都市横浜の母体でもありました。しかし、関東大震災と第二次世界大戦によって、歴史的遺産の多くを失いました。そのため地元の人でさえ、東海道がどこを通り、宿場町の様子がどのようなであったかを知る人は少なくなりました。現在、宿場町当時のものはほとんど失われてはいませんが、台町の坂などに、当時の面影を見つけることができます。

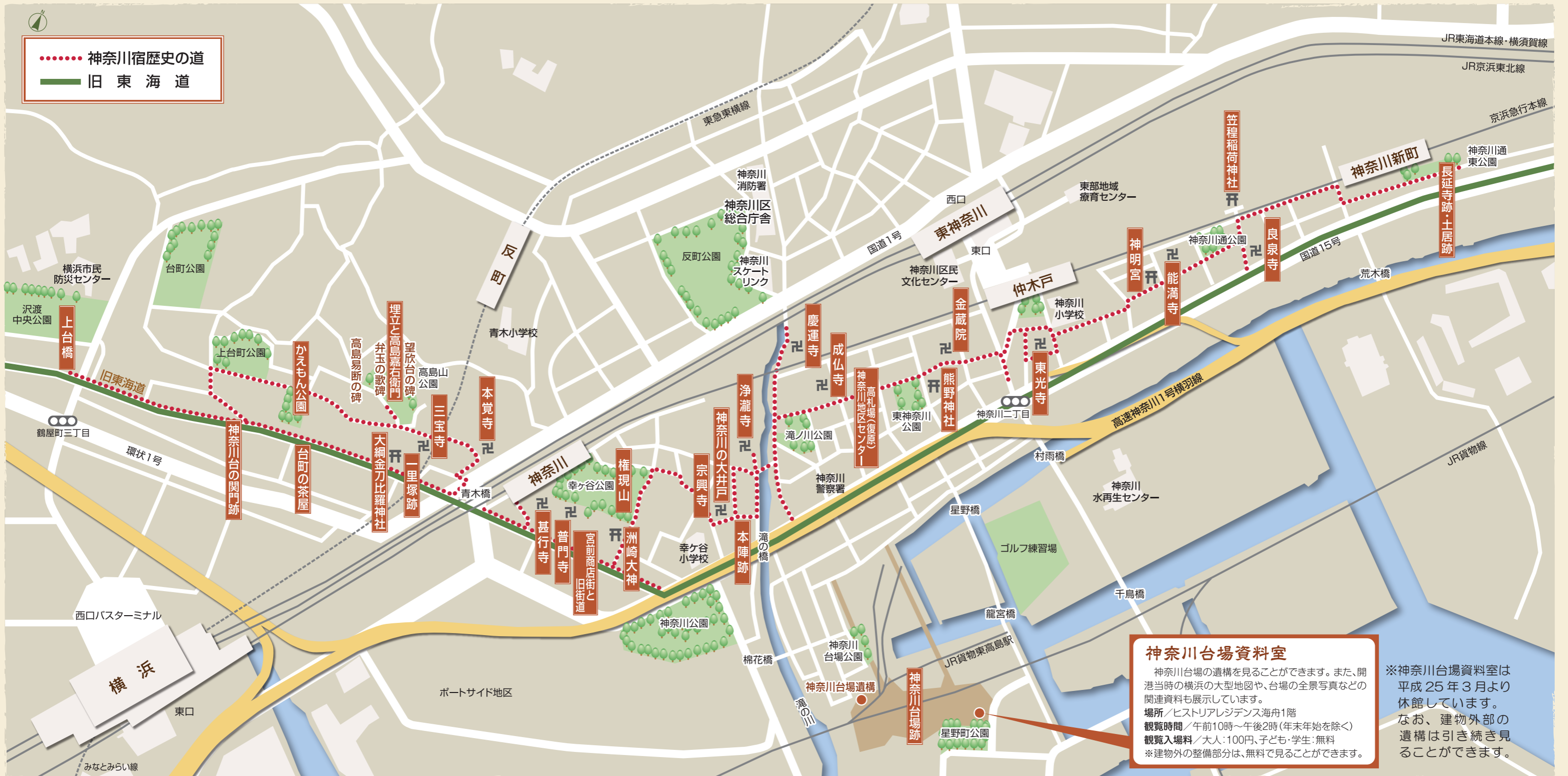
絵図にみる神奈川宿

神奈川宿は日本橋を出て三番目の宿場町。下図は江戸後期・幕府の道中奉行所が作った『東海道分間延絵図』です。右側が江戸方向（東）、左側が京都方向（西）となります。図の中央には滝ノ橋が描かれ、この橋の東側に神奈川（石井）本陣、西側に青木（鈴木）本陣が見えています。右端は江戸側からの入口で、長延寺が描かれています。左側の街道が折れまがったあたりが台町。台町の東側には神奈川湊が描かれています。

この神奈川が一躍有名になったのは、安政元年（一八五四）に日米和親条約（神奈川条約）が締結されてからです。その四年後に結ばれた日米修好通商条約では神奈川が開港場に決められました。後に横浜に変更されました。開港当時、この図に見られる多くの寺が、諸外国の領事館などに充てられました。「神奈川宿歴史の道」のルートはほぼこの範囲を対象としています。



「東海道分間延絵図 神奈川」通信総合博物館所蔵



神奈川台場資料室
 神奈川台場の遺構を見ることができます。また、開港当時の横浜の大型地図や、台場の全景写真などの関連資料も展示しています。
 場所／ヒストリアレジデンス海舟1階
 観覧時間／午前10時～午後2時(年末年始を除く)
 観覧入場料／大人:100円、子ども・学生:無料
 ※建物外の整備部分は、無料で見ることができます。

※神奈川台場資料室は平成25年3月より休館しています。なお、建物外部の遺構は引き続き見ることができます。

神奈川宿歴史の道

(魅力ある道路づくり事業)

- 所在地 横浜市神奈川区台町～新町
- 全長 約4.3km
- 事業主体 横浜市道路局神奈川土木事務所
- 事業年度 昭和60年度～平成4年度
- 整備の主な概要
 - 舗装材質 亀型レンガブロック
 - 名所ガイドパネル設置
 - 車止め、街路灯など、ストリートファニチャーのデザイン統一
 - 周辺の公園、市民利用施設などの一体整備

歴史や伝説の残る街は、その街そのものが生きた歴史資料館のようなものです。歴史を生かした街づくりの視点から古い資料に新しい光をあててみると、コンクリートに覆われた現代の街並の中から、かつてのさまざまな人びとの営みがよみがえってきます。

「神奈川宿歴史の道」は、このような歴史や伝説を残す要所にガイドパネルを設けるとともに、道づくりと景観整備を行い、横浜市のルーツを楽しく訪ね歩くことができるようにした歴史の散歩道です。

ガイドパネルは、形や色彩を歴史の道にふさわしいデザインにし、雨風にも強い材質によりつくられています。パネル内の解説はできるだけわかりやすく、絵図や古地図などの歴史的資料を用い、見て楽しい表現をとっています。また、ガイドパネルの周りには樹木を植えるなど、道の雰囲気づくりや街の景観にも配慮しています。

道づくりについては、約四キロメートルの道を安全で楽しく歩ける工夫がされています。主要ルートの歩道はこげ茶色のレンガタイルが敷かれ、この道に沿って行くと自然にガイドパネルが立つ歴史的な場所に行きつくことができます。パネルの前の歩道には「東海道」にちなんで「青海波」のシンボルマークがデザインされています。パネル脇に立つ街路灯にも、この青海波の

デザインが用いられています。また、歩道に設置された車止めには、浦島伝説にちなんで亀がデザインされています。



車止め



街路灯

「東海道」にちなんで「青海波」のシンボルマークがデザインされています。パネル脇に立つ街路灯にも、この青海波の

神奈川宿歴史の道

かながわのしゅくれきし
みち

上台橋

「神奈川宿歴史の道」は、西側の上台橋より始まります。

かつてこのあたりは、潮騒の間こえる海辺の道でした。この場所から見えた朝日は、ひとときわ美しかったのでしょうか。「神奈川駅中図会」にも、その姿が描かれています。

この地に橋ができたのは、昭和五年（一九三〇）。開発がすすみ、切り通しの道路ができるとともに、その上に橋が架けられたのです。

この橋を渡り東へ坂道を上りきったあたりに、関門跡の石碑が建っています。

台町の茶屋

現在の台町あたり、ここはかつて、神奈川湊を見おろす景勝の地でした。

弥次さん・喜多さんが活躍する『東海道中膝栗毛』にも、「爰は片側に茶店軒をならべ、いづれも座敷二階造、欄干つきの廊下、棧などわたして、浪うちぎはの景色いたってよし」とあります。「おやすみなさいやーせ」……茶店女の声に引かれ、二人はぶらりと立ち寄っています。鱈の塩焼をさかかなに一杯ひっかけた後、気ままな旅を続けたのでした。

下の図の中に見える「さくらや」が、現在の料亭田中家のあたりだといわれています。



「神奈川駅中図会 西台之図」横浜市歴史博物館所蔵

います。この付近の地形は、今でも旧東海道の面影を残しています。



「金川砂子附神奈川史要 台町茶屋之景」名著出版

神奈川台の関門跡

台町のこの周辺に、神奈川台の関門がありました。

開港後、外国人があいついで殺傷されましたが、その犯人はなかなか捕えられませんでした。イギリス総領事オールコックを初めとする各国の領事たちは、幕府を激しく非難しました。そこで幕府は、横浜周辺の主要地点に関門や番所を設け、警備体制を強化しました。

この時、神奈川宿の東西にも関門がつくられ、そのひとつが西側・神奈川台の関門です。

文久二年（一八六二）の生麦事件のさ

金刀比羅神社

田中家の前をさらに下ると、大綱金刀比羅神社の前に出ます。この神社は社伝によると平安末期の創立で、もと飯綱社といわれ、今の境内後方の山上にありました。その後、現在の地へ移り、さらに琴平社を合祀して、大綱金刀比羅神社になりました。かつて眼下に広がっていた神奈川湊に出入する船乗り達から深く崇められ、大天狗の伝説でも知られています。

いには、島津久光の行列の通過を待つて、ただちに関門を閉じ、イギリス兵の追撃を封じたといわれています。



一里塚跡

江戸時代には、金刀比羅神社前の街道両脇に、日本橋より七つ目の一里塚が置かれていました。

一里塚とは江戸の日本橋を起点として一里(約四キロ)ごとに置かれた塚のことです。

下の図の中ほど、街道北側に、その姿が描かれています。土盛の上には桜が植えられた大きなものでした。

現在の金刀比羅神社の鳥居横あたりが、その塚跡といわれています。

三宝寺

三宝寺で忘れてはならない人物として、嘉永四年(一八五二)に住職になった、第二二世住職弁玉和尚がいます。

和歌の長歌を橋守部に、短歌は岡部東平に学んだ弁玉は、江戸末期から明治初期にかけて活躍した歌人でもあり、文明開化の新事物を詠いました。

昭和五十年(一九七五)、開宗八百年を記念して、約十メートルの高架柱上に本堂を新築し、市内でも珍しい建造物の寺院となりました。



「神奈川駅中図会 一里塚三宝寺飯綱社之図」横浜市歴史博物館所蔵

埋立と高島嘉右衛門

「歴史の道」には、関門跡から旧街道を離れ、この街道と並行して丘の上を通り青木橋に至る、もう一つのルートがあります。静かな山の手の坂道を抜けて行くと、すぐ下に旧街道を見おろす丘の上に出ます。

鉄道用地の埋め立てに力を尽くした横浜の実業家が、高島嘉右衛門です。嘉右衛門は、請負業を始め、学校・ガス会社・芝居小屋などを経営し、高島易断を創始するなど多彩な活動をした人物です。

彼はこの丘の上から埋め立てを指揮

本覚寺

坂道を下っていくと、本覚寺の山門前に出ます。

開港当時、アメリカ領事館に充てられたのが、この本覚寺。神奈川領事であったドーアは、庭の松の枝を払い落とし、この木の上に星条旗を掲げたといいます。さらに、この寺の本尊を板囲いで覆い、山門をペンキで塗り、日本人の立ち入りを禁じたといわれています。

安政五年(一八五八)日米修好通商条約締結に際し、アメリカ公使ハリスとの交渉にあたった全権委員・岩瀬忠震を記念する石碑が境内に建てられています。



「高島嘉右衛門の肖像」
横浜開港資料館所蔵

し、後年この地に住みました。そのため、埋立地は高島町、この丘は高島山と呼ばれるようになりました。現在の高島山公園には、嘉右衛門を顕彰する「望欣台の碑」が、そのすぐ西の住宅地には「高島易断の碑」が立っています。

やがてこのあたり一帯は埋め立てられ、古い「神奈川湊」から新しい「ミナトヨコハマ」へと姿を変えていきました。

鉄道の開通と青木橋

本覚寺のある丘と幸ヶ谷公園のある丘とは元来ひと続きでした。この丘を切り開き、明治五年（一八七二）、新橋―横浜間に鉄道が通されたのです。この工事に伴い、鉄道をまたいで旧東海道を結んで架けられた橋が青木橋です。当時、神奈川の停車場は、この橋のすぐ南側にくらわれていました。

その後、明治三十七年（一九〇四）には、後に横浜市電となる横浜電気鉄道が神奈川―大江橋間に、翌三十八年（一九〇五）には京浜電気鉄道が川崎―神奈川間に、また、大正十五年（一九二六）には、東京横浜電気鉄道が丸子多摩川―神奈

川間にそれぞれ電車を走らせました。このように交通の中心地として栄えた青木橋付近も、昭和三年（一九二八）、現在の横浜駅ができるとともに、その中心性は失われていったのです。



「神奈川蒸気車鉄道之全圖」横浜開港資料館所蔵

甚行寺

青木橋を渡り、旧東海道の道筋にある宮前商店街に入ると、山側に甚行寺があります。開港当時、甚行寺の本堂は土蔵造でしたが、改造を加えてフランス公使館に充てられたといわれています。

大関東震災と横浜大空襲によって建物は失われましたが、昭和四十六年（一九七二）に本堂・客殿を再建し、現在に至っています。

境内には横浜市の名木古木に指定されている、樹齢二百年以上のイチヨウの古木があります。



普門寺

甚行寺の先に普門寺があります。

普門寺は、洲崎大神の別当寺であったため、「洲崎山」と号し、真言宗智山派に属します。

また、寺号の「普門」は洲崎大神の本地仏である観世音菩薩を安置したことに由来し、観世音菩薩が多くの人々に救いの門を開いているとの意味で名付けられたと伝えられています。



宮前商店街と旧街道

宮前商店街は、台町あたりとともに、旧東海道の風情を今に留めるところで、この歴史の道のルートでは唯一の商店街になっています。かつて、神奈川宿の「亀の甲せんべい」は有名で、幕府や諸大名の御用達だったといわれます。



近隣のポートサイド地区では「アート&デザインの街」をテーマに、都市型住宅・商業・業務・文化機能が調和した街づくりが進められており、これを機に由緒あるこの地域のあらたな発展が期待されます。

洲崎大神

宮前商店街をさらに進むと、洲崎大神に出ます。源頼朝が、安房国の安房神社の神をこの地に招いたのが、洲崎大神の始まりといえます。

昔、この神社にあった御神木のアハギがなまり、青木町の町名になったといわれています。『江戸名所図会』に描かれた雰囲気は、今も石鳥居や周囲の地形などに残っています。神社前の道を海側へ、第一京浜に出るあたりが舟着き場でした。かつて六月のお祭りには、みこしを神社前の海にかつぎ入れ、安房神社の神と対面させる「お浜下り」という神事が行われました。

宗興寺とヘボン博士

幸ヶ谷公園から幸ヶ谷小学校脇の坂道を下ると、『神奈川駅中図会』では権現山の麓に描かれている、宗興寺に出ます。

開港当時、アメリカ人宣教師で医者であったヘボン博士が、ここに施療所を開いていました。これを記念する石碑が境内に立てられています。

このヘボン博士は、「ヘボン式ローマ字」でよく知られ、日本で最初の和英辞典を完成し、聖書の翻訳なども行いました。後に、明治学院を創設するなど、わが国の教育にも尽くした人でした。



権現山

神奈川宿を描く絵図には、街道北側にひととき高い山が描かれていることが多く、その山を権現山といえます。

幕末に描かれた『神奈川権現山外国人遊覧』の図にも、外国人の背後にはこの山が見えています。しかし、今はもう、それらしき山はありません。幕末から明治にかけてこの山が削り取られ、その土が台場や鉄道用地の埋め立てに使われたのです。

現在、幸ヶ谷公園や幸ヶ谷小学校のある丘は、権現山の跡であり、本覚寺のある丘ともひと続きでした。

この権現山は、古戦場として知られています。戦国時代、関東管領上杉一門の

神奈川の大井戸

宗興寺の境内のすぐ脇には、「神奈川の大井戸」と呼ばれる井戸があります。

徳川将軍や明治天皇の通行の際、その水が使われたといわれています。

この水の量が増えると翌日の天気がよくなるといわれ、街道を通る旅人には、「お天気井戸」とも呼ばれていました。



「神奈川権現山外国人遊覧」横浜市歴史博物館所蔵

家臣でありながら、北条早雲に内通して主君に反旗を翻した上田蔵人の砦がこの山の上にあります。管領方二万の大軍が山上の上田方の砦を包囲し、十日にわたる戦いの後、ついに上田方の砦が落ちたといわれています。

本陣跡

宗興寺から東へ進むと滝の川に出ます。

この川沿いを海側へ行くと第一京浜に突きあたります。この付近より東京寄りには、旧東海道が拡幅され第一京浜となっています。その上には現在、高速道路が走っています。

宿場町時代には、滝の川を挟んで江戸側に神奈川(石井)本陣、その反対側に青木(鈴木)本陣が置かれていました。

本陣というのは、大名や公家などが宿泊や休息をする幕府公認の宿です。

『神奈川本陣については、『金川砂子』や

滝の川と河童

滝の川は、権現山から流れ出る水が、滝となって落ちていたので、滝の川といわれるようになったとの説があります。この川には、「河童のくれたさげこうべ」という伝説があります。

昔々、滝の川には河童が住んでいました。旅人を困らせていると聞いた一人の侍が、見事にこの河童を捕まえました。

その河童が泣き泣きいうことには、……「ある年一匹のうわばみが現われて、亭主は殺されてしまいました。それからというものは、二人の子どもを養うために悪いことは知りながら、つい

本陣を勤めた石井家に伝わる資料があり、その外観や間取りなどを知ることができます。



『金川砂子附神奈川史要 神奈川御本陣』名著出版

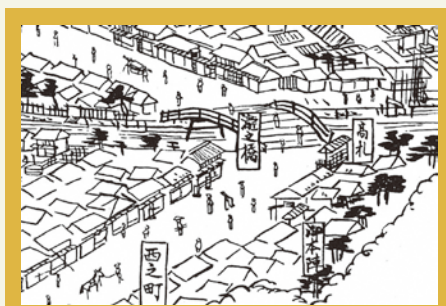
ついで迷惑をかけました。以後いっさい悪いことはいたしません。約束のしるしに、大事な亭主の首をさしあげます。どうぞお許しください……」

哀れに思った侍は許してやりました。その夜、河童は約束通り首を届け、以後宿場は静かになったそうです。

高札場

左図の『金川砂子』には、滝ノ橋のたもとに、高札場が描かれています。

高札場は、幕府の法度や掟などを庶民



『金川砂子附神奈川史要 滝ノ橋権現山』名著出版



に徹底させるために設けられた施設です。

宿場の施設としては重要なものでしたが、明治に入り情報伝達の手段が整うにつれて、やがて姿を消してしまいました。

当時の高札場は、神奈川県警察署西側付近にありました。上の写真は、資料をもとに神奈川地区センターの前に復原したものです。その規模はおおよそ、間口五メートル、高さ三・五メートル、奥行一・五メートルと大きなものでした。

浄瀧寺

下の写真は、滝の川のほとりにある浄瀧寺です。

開港時にはイギリス領事館に充てられました。本堂を始めとして諸所にペンキが塗られたといわれています。

横浜大空襲で焼失してしまいましたが、当時、イギリス領事が手植した「多行松」と呼ばれる松があり、横浜十名木とされています。



神奈川台場跡

旧街道をはずれ、滝の川に沿って海に向かい、J-R貨物線に突きあたる辺りが、神奈川台場跡です。開港当時大砲が置かれ、港を警備していました。

江戸幕府は伊予松山藩に建設を命じ、勝海舟の設計で海防砲台を構築しました。当時の台場は面積約八千坪の海に突き出た扇形で、約七万両の費用と一年の歳月を費やして万延元年（一八六〇）に完成さ



「神奈川台場図」横浜開港資料館所蔵

れました。明治三十二年（一八九九）に廃止されるまで礼砲用として使われましたが、埋め立てが進み、現在では石垣の一部のみ見ることが出来ます。

成仏寺

慶運寺のすぐ近くに成仏寺があります。開港当時、成仏寺はアメリカ人宣教師の宿舎に充てられました。

へボンは本堂に、ブラウンは庫裏に住んだといわれています。へボンが友人に宛てた手紙の中に、このことが書かれています。それによると、広い本堂を襖で仕切り、大小八つばかりの部屋をつくったとあります。その結果、ずいぶん住みよくなった、広い庭も美しく気に入っている、と書かれています。

また、ブラウンは聖書や賛美歌の翻訳に尽力した人です。



慶運寺

滝の川に沿って山側に進むと、慶運寺前に出ます。開港当時、この寺はフランス領事館に充てられました。

浦島丘にあった観福寿寺が慶応年間の大火で焼失したため、浦島伝説にかかわる記念物がこの寺にもたらされました。それ以来、慶運寺は「浦島寺」とも呼ばれています。浦島太郎が竜宮城に行った時、乙姫様からいただいたという菩薩像などが伝わっている、といわれています。

神奈川地区センター

成仏寺から東へ向かうと、ほど近い場所に神奈川地区センターがあります。

歴史の道のルートは、この建物の前を通り、さらに東の金蔵院へと続いています。地区センター前の広場には、かつて滝ノ橋のたもとにあった「高札場」が、往時をしのんで復原されています。

また、この広場の床面には、「神奈川宿歴史の道」のシンボルマークとなった「青海波」がデザインされています。



熊野神社

地区センターを過ぎると、道の右手に東神奈川公園があります。この公園のすぐ向こうに、熊野神社が見えてきます。

この神社は、もと権現山にありました。平安時代に、紀伊の熊野権現を招いたことによる、といわれています。その後、江戸時代の中頃に金蔵院の境内に移され、明治初めの神仏分離令により、金蔵院から分かれました。

下の『金川砂子』の「夜宮祭礼」図は、江戸時代後期



「金川砂子附神奈川史要 熊野社夜宮祭礼」名著出版



の神社のにぎわいが描かれています。社殿の脇で神楽が舞われ、参道の東側にみこしが置かれています。

現在の社殿は戦後再建されたものですが、境内にはイチヨウの古木などが残っています。

金蔵院

金蔵院は熊野神社の北側にあります。しかし、江戸時代は東西に並んでいました。

『金川砂子』にその様子を見ることが出来ます。この図によると、金蔵院の境内は今より広く、門の位置も熊野神社と



並んでいました。そしてこの門まで、街道から参道が延びていました。左中段は、昭和四十年（一九六五）につくられた現在の表門です。



「金川砂子附神奈川史要 金蔵院熊野社御殿跡」名著出版

東光寺

東光寺の本尊はもと太田道灌の守護仏でしたが、道灌の小机城攻略後、小田原北条氏の家臣である平尾内膳がこの仏を賜り、東光寺を草創したといわれています。

また道灌は内膳に本尊を与えるに際し、「海山をへだつ東のお国より、放つ光はここもかわらじ」との歌を詠んだといわれ、この歌が東光寺の名称の由来とも伝えられています。



神明宮

江戸時代の神明宮は能満寺に所属していましたが、明治初めの神仏分離令により分かれました。

かつて境内を流れていた上無川に牛頭天王の御神体が現われ、洲崎大神およびこの神社に牛頭天王を祀ったとの伝承もあります。また、境内にある梅の森稲荷には、若い女旅人にまつわる哀れな話も伝わっています。



能満寺

東光寺の前を通り、さらに東へ進むと、能満寺があります。

能満寺は、鎌倉時代の創立とされています。

その由来は、内海新四郎光善というこの地の漁師が海中から虚空蔵菩薩を拾い上げ、これを祀ったと伝えられています。



笠程稲荷神社

良泉寺を左に折れ曲り、京浜急行のガード下をくぐり抜けると、笠程稲荷神社です。

この神社の名前には、次のような由来があります。笠をかぶった人がこの前を通ると、不思議に笠が脱げ落ちたそうです。そのため笠脱稲荷と呼ばれるようになり、その後、笠脱を笠程に改めたといわれています。



良泉寺

能満寺を後に東へ向かうと、良泉寺の塀に突きあたります。

この寺には、次のような話が伝わっています。開港当時、幕府から外国人宿舎にするように命ぜられた住職は、屋根をはがし、修理中との口実でこれを断ったといわれています。



長延寺跡・土居跡

京浜急行・神奈川新町駅の近くに、神奈川通東公園があります。ここが「歴史の道」の終点です。

昭和四十年(一九六五)に移転するまで、ここに長延寺が建っていました。この寺は、開港当時、オランダ領事館に充てられました。

また、このあたりは、神奈川宿への江戸からの入口にあたります。

下の図は、神奈川本陣・石井家に伝わった土居の絵図です。街道両脇に土盛りがされ、その高さは約二・五メートル。その上には竹矢来が設けられていました。



「神奈川宿入口土居絵図」神奈川県立公文書館所蔵

